

## 【目次】

1. 所感「ある願いー広島大学の慰霊碑をめぐる」（植木研介氏の投稿）
2. 広島大学の教養教育科目「平和科目」の平成24年度の授業担当について
3. 随想「まだまだやれることがありそうだ——初年度「平和と人間」を終わって」（渡邊一雄氏の投稿）
4. TSS文化大学の一般教養講座の開講について
5. 退職された教職員への入会案内の送付について
6. 事務局幹事の増員について
7. 会員の異動について

### 1. 所感「ある願いー広島大学の慰霊碑をめぐる」

植木研介（元文学部）

広島では、多くの学徒と教員が原爆で亡くなっている。旧制中学校の学徒動員された作業地の被災地は、現在の平和大通りに概ね沿って並んでいる。疎開作業に動員されなかった学生も、数多く亡くなった。8月6日が巡ってくるたび毎に心の中に浮かんでくる思いがわたくしにはある。そのことを書いておきたい。

1995年の8月6日以来わたしは、ヒロシマの町を歩けるようになった（実は、その時以前の、わたくしは、8月6日は家で休む日になっていた）。その経緯はここでは述べない。が、それ以降、例外があるにせよ、ほとんど同じような順路で慰霊祭を巡っている。

朝、7時半過ぎから、国泰寺中学校の南端から幅の狭い道路一つ隔てたところにある、小さな地藏尊のある公園で行われる慰霊祭に出席する。ここでは、1945年に発足して間もない広島女高師の附属女学校となった、旧山中女学校の生徒が疎開作業に集合し、数百名が被災し死亡した。慰霊祭そのものは、高齢化した卒業生が細々と運営している。だが参列する人々は小さな公園にあふれるほど参集する。そして必ず最前列の椅子には、旧山中女学校が歴史の変遷を経て生れた、現在の、広島大学附属福山高校の学生代表2名と引率の教員1名が必ず出席している。

ここでの式典がすむと、ごく近い距離にある、広島大学原爆死没者追悼之碑（昭和49年8月6日製作）のある、廣大東千田キャンパスに歩いて行く。大学としての正式の追悼式は、朝10時から始まり、在職当時は時折この追悼式に参列したが、今は独りで一足早く9時過ぎに追悼之碑と、広島文理科大学・広島高等師範学校原爆死没者遺骨埋葬の地と刻された石柱（昭和47年12月25日建立）に挨拶をする。追悼之碑には現在の広島大学に繋がる全ての前身校の名称が刻まれている。

この後は、10時から開かれる、平和公園内の広島市のレストハウスでの、集まりに出るか、天満川沿いの小網町の土手にある、旧広島市立中学校（現在の基町高等学校）の慰霊祭に出席する。ここでも生徒と教員が全滅した。かつては市立中学校のOBが慰霊祭の手配をしていたがこちらの方は高齢化に伴い、基町高校そのものに運営をゆだね、高校生が式次第に従って音楽が奏でられ合唱と共に式が進んでいる。多分基町高校の平和教育の一環に取り入れられているのであろう。

昨年の4月から広島大学で「平和科目」が新設された。遅まきながら「ひろしま」の名前を持つ大学として当然のことがなされたことを嬉しく思っている。しかし、大学の催す慰霊祭に、附属小・中・高の生徒も、広島大学の学生も関与していないし、参列もしていない。かつての文理科大学の南門付近に大学生や附属中学生の遺骸が何体か散乱していたというのに。わたしの願いというのは、大学の慰霊祭に現在の児童や生徒や学生の姿が見られるように、「平和科目」の中で思考した学生の中からその動きが出てくれたらというのが願いである。

### 2. 広島大学の教養教育科目「平和科目」の平成24年度の授業担当について

平成23年度から開始されました広島大学の平和科目について、平成24年度も本会からは、次のような会員のご協力により実施されることになりました。平成23年度は、前期・後期とも東千田キャンパスで開講されま

したが、平成24年度は大学の平和科目ワーキンググループの要請により、前期は東広島キャンパス、後期は広島市内の東千田キャンパスで開講することになりました。昨年度の担当世話人の渡邊一雄先生が、体調を崩され、平成24年度は植木研介先生が世話人を担当されることになりました。前期の東広島キャンパスでの受講者数は70名程度とのことで、昨年の3倍以上に膨らんでいます。担当の先生方にはご心配をおかけしますがなにとぞよろしくお願い申し上げます。

#### **(前期)「平和と人間Cー広島で学ぶ(原爆とは何だったかー)」: 東広島キャンパス**

第1回 問題提起と組み立て、単位の認定(元文学部 植木研介)

(1) 戦争とは何か

第2回 ナポレオン戦争とヨーロッパ(元文学部 岡本 明)

第3回 民族紛争(元総合科学部 井上研二)

(2) 原爆とは何だったか——ある被爆体験

第4回 被曝をどう考えるかI(元教育学部 北川建次)

第5回 被曝をどう考えるかII(同上)

第6回 被爆体験の重みI(元文学部 寺地 遵)

第7回 被爆体験の重みII(同上)

第8回 ある被爆体験I(元文学部 植木研介)

第9回 ある被爆体験II(同上)

第10回 小説を通してみる原爆I(元教育学部 岩崎文人)

第11回 小説を通してみる原爆II(同上)

第12回 復興と被爆建物の保存(元工学部 石丸紀興)

第13回 放射性物質は何を残すか(元医学部 武市宣雄)

第14回 被爆資料と総括(元原爆放射線医学研究所 宇吹 暁)

第15回 むすび——現在から未来へ(元文学部 植木研介)

#### **(後期)「平和と人間Dー広島から未来に向けてー」: 東千田キャンパス**

第1回 問題提起と組み立て、単位の認定(元文学部 植木研介)

(1) 戦争は何をもたらすか

第2回 ナポレオン戦争とヨーロッパ(元文学部 岡本 明)

第3回 民族紛争(元総合科学部 井上研二)

第4回 戦争と軍縮(元経済学部 高橋 衛)

(2) 被爆体験をどう伝えるか

第5回 被曝をどう考えるかI(元教育学部 北川建次)

第6回 被爆体験の重み(元文学部 寺地 遵)

第7回 ある被爆体験I(元文学部 植木研介)

第8回 小説を通してみる原爆(元教育学部 岩崎文人)

第9回 復興と被爆建物の保存(元工学部 石丸紀興)

第10回 被爆資料と総括(元原爆放射線医学研究所 宇吹 暁)

(3) 原子核科学のこれからを考える

第11回 原爆の威力(元理学部 大杉節)

第12回 原発を考える(元理学部 大杉節)

第13回 放射性物質と人体(元医学部 武市宣雄)

第14回 放射線とこれからの医学(元医学部 武市宣雄)

第15回 むすび——現在から未来へ(元文学部 植木研介)

### **3. 随想「まだまだやれることがありそうだ——初年度「平和と人間」を終わって」**

渡邊一雄(元総合科学部)

平和科目『平和と人間』の初年度は、私が緊急入院のため最後の講義と期末試験を欠席する羽目に陥りました(1月末から2月初め12日間)。平成24年度計画も途中で投げ出しました。日本の大学人なら1年の中でこの

時期の重要さは語るに落ちます。それでも切り抜けられたのは、授業担当の先生方、教養教育委員会、教務の皆さまの並々ならぬご理解ご努力と、急遽、全体処理と 24 年度の計画推進を「任せて」と引き継いで下さった植木研介幹事の甚大なご苦勞のたまものです。心から感謝申し上げる次第です。

企画責任者の私は 23 年度前期全授業、後期も新規担当の先生を中心に約半分（8回）を聴講させて頂きました。ここに自由に私見を述べます。

他の先生方が教室で実際にどんな講義を行っているのか、まして専門外の同僚となるとベテラン同士でも意外と知らないのではないのでしょうか。ことに気合で授業する私には、周到的準備で冷静に 90 分をまとめる講義には感銘しきりでありました。また年齢のゆとりでしょうか専門外の講義が実に心豊かに勉強できました。今後、会員同士の任意の聴講システムが作れば、学問を通じた会員間の相互親睦が大いに深まると思えました。

特筆すべきは、自ら被曝を経験されたお三方（北川建次、寺地 遵、植木研介先生）の講義です。これほどの深みある教育効果は教室にはじめて実感できました。私の年のせいとも考えましたが、周囲の若い学生たちも肌で受け止めていることをひしひしと感じました。「燃え尽きるまで若い人に語りたい」と口に出された先生もおられ、「ご無理なさらず」などの社交辞令的な言辞が真に恥ずかしく感じました。

大学における講義成立の大前提は、“生きた人間”を通しての『学問と学者への敬意』しかないと改めて痛感します。10 数年前、テレビ授業の広大への導入会議で、合理主義批判を強く述べた自分の姿を思い出してしまいました。

問題は学生です。“学問”への接し方に重い感懐がありました。なにより、多くの学生が“テレビを見る”ように教員を眺めている異様さです。考えながら講義の論理やメリハリに反応してノートにまとめている学生がほとんどいないのです。これでよく我慢できるな。学生が講義を“楽しめるかどうか”で評価するようでは大学ではありませんね。勿論いたずらにペダンチックで晦渋なばかりでは困るでしょうが教員はエンターテイナーではないのだから。ちなみに、私のノートは授業 1 回あたり平均 4～5 頁で、資料を張り付けると前期だけで大学ノート一冊が完全に完成しました。これは宝です。

そして、多くの学生が遠心分離をかけたように教室の後ろと両縁に着席する中で（これは授業が回を重ねるごとに改善された。嬉しかった）、どんな話にも椅子にそり返って腕組みし脚を投げ出している学生が一人いました。私なら「きちんと座れ！テレビちゃんや！」と云ってしまいそうです。そして、実はこの学生だけが授業後に多くの質問やコメントを持ってくるのです。違和感が衝撃でした。講義が、学者（学問の先輩）の話への敬意と礼儀、すなわち“人間の交わり”を基盤に成立していないのだ——。これ個人の問題？

きわめつけは、大杉先生が授業で学生に発言を求めたときです。先生は人類が対面する地上の全エネルギーの起源と、核エネルギーの本質、その利用法と限界を判りやすく解説されたあと、福島事故の状況と本質、科学的見通しを論じられました。そして、学生に向かって「我々人類はこれからいかに核エネルギーと向かい合えばよいか」と問われたのです。案の定、手を挙げる学生はいません。ややあって先生が学生を指名しました。するとこの学生は、言葉に詰まった挙句、まず「原発は必要だと思います」と云ったのです。ディベートのパターンかなとさらに聞き耳を立てたのですが、ついぞこの本質に触れる発言は聞かれませんでした。

実はそれだけではなかったのです。先生は次々と 5、6 人の学生に発言を促しましたが、何と全員、小考のあと「私も原発は必要だと思います」としか云わないのです。

私は思わず身を乗り出して、「先生は必要かどうかなどではなく、どう考えるかとおっしゃってるんだ！」と思わず（小声で）叫んだかもしれません。原子力の本質と問題点があればほど端的に整理され、君たちはあんなに熱心に聞いていたのに——。政治に責任を負わない若さの特権として、為政者、いや人類の悩みへの省察、欺瞞への批判、未来（理想）への想いなど何もないのか——。いや、あるけど語彙が不足しているだけ？ならば何か意味あるフレーズを云ってくれば先生が豊かな答えをフォローしてくれたらだろうに。先生は自己の価値観の表出を“適度に抑制”されていました。ワクワクして聞いていた私は、学生たちが本質的対話を故意に避けて現実肯定に甘んじる様子を、いかにも人間性の劣化と感じてしまう寂しさをどうしても否定できませんでした。

勿論、これらは一朝一夕では解決しないでしょう。誠実さは昔も今も変わらない若者が大学で“学ぶ”エネルギーは、お金や損得ではなく“真実を求める心とウソへの怒り”という、人間の自然な心に発するはずです。年寄りたちが利害を超越して学問をこんなに真剣に話しかけるのをみて、今どきの若者が自然に感じ取るものは小さくないはずです。ここには確かに学問への尊敬を引き出せる細い道が見えるように感じました。

われら元教員は“ごく自然に”これを提起できそうです。まだ大学でできることは確かにあり、小さくもないと思えました。

### 3. TSS文化大学の一般教養教育講座の開講

東広島の広島大学マスターズでは、テレビ新広島が55歳以上の健康で学習意欲のある人を対象として開講しているTSS文化大学（元広島大学長の牟田泰三先生が学長）の一般教講座を平成20年度から担当されていますが、東広島の広島大学マスターズには医学を専門にされる先生がおられないことで、同講座の世話人を務めておられる東広島の広島大学マスターズの副代表幹事の安藤忠男先生から本会の代表幹事の渡邊一雄先生のほうに協力依頼があり、渡邊先生のご紹介により、次の3名の方に講座を開講していただく事になりました。各先生には、一般教養講座の1回分（火曜日の10時から11時30分まで）の講演をお願いすることになっています。

碓井 亜先生（元医学部）：「女と男の更年期」

大谷美奈子先生（元医学部附属病院）：「救急医療－熱傷、熱中症－」

武市 宣雄先生（元医学部）：「甲状腺と健康管理－チェルノブイリと福島原発事故も加えて－」

平成24年度は、東広島のマスターズの開講講座に参加させていただくことになりましたが、平成25年度からは広島のマスターズが開講する講座数を増やし、将来的に本会も独自の講座を開講するかどうか、現在、幹事会で検討しています。本会も開講することになりました際には、会員のみなさんのご協力をお願いしたいと思います。

#### 4. 退職された教職員への入会案内の送付について

本会の新入会員を募集するため、3月末で退職された教職員の名簿・住所などの提供について、昨年までは学長秘書室を通じて人事グループにお願いしていましたが、個人情報ということで情報の入手が難しく、去年は教職員が退職される前の3月に校友会事務局から、各部署の事務局に退職者に入会案内を配布していただくようお願いしていましたが、残念ながら入会者はありませんでした。

しかしながら、本会が広島大学校友会の登録団体になっていることから、平成23年度の教職員の退職者名簿につきましては、広島大学校友会事務局を通じて、次の事項について記載した文書を人事グループに提出することにより、提供していただくことができるようになりました。この件につきましては、学長秘書室、人事グループ、校友会事務局の皆さんに大変お世話になりましたことをお伝えさせていただきます。

(1) 使用目的、(2) 退職者の範囲、(3) 必要なデータ、(4) 提供希望日時、(5) 提供媒体

なお、広島大学法人本部の人事グループから提供して頂きました退職者名簿につきましては、個人情報ですので十分に取り扱いに留意することはもちろんですが、本会の活動目的のみに使用させていただき、個人情報保護法を遵守して厳正に管理させていただきますので、ご了解ください。

このたび法人グループから提供いただきました名簿に基づき、3月末に退職された教職員36名に、5月1日付けで入会案内を送付させていただきました。5月21日現在で2名の教員にご入会いただきました。

#### 5. 事務局幹事の増員について

本会の運営体制を強化するため、事務局幹事から幹事にご就任いただけないかご意向をお聞きしてきましたが、現在のところ、次の会員に幹事会のメンバーに加わっていただくことを了承していただいています。

大杉 節（元理学部）

岩崎 文人（元教育学部）

北川ふさえ（元事務部）

#### 6. 会員の異動について

##### 【入会者】

植村 泰夫（元文学部教授）

井内 康輝（元医学部教授）

広島大学マスターズ広島事務局

〒730-0053

広島市中区東千田町一丁目1番89号

広島大学東千田地区支援室気付

(FAX) 082-542-6964

(E-mail) masters2@hiroshima-u.ac.jp